舟　は　スローライフ・持続可能社会　の　先進役　　2025 年 1 月

お 江 戸 舟 遊 び 瓦 版　1078 号

水彩都市江東　　こころ美しい日本の再生　　安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会　　江東区千田 13-10

日本海洋政策学会年次大会『資源の利活用と海洋保全』

日時：2024.12.21　　所：東京大学小柴ホール

基調講演

「最近の海洋政策の動き」高杉典弘（内閣府）

- 経済安全保障の重要性や脱炭素社会実現の必要性から海洋開発の必要性が急速に高まっている。
- 再エネ海域利用法改正法律案：洋上風力発電の導入促進のために拠点港湾制度が検討されている。

「EEZ における洋上風力発電に関する沿岸国の立法と占用許可」来生新（神奈川大学海とみなと研究所）

- EEZ の管理は、国連海洋法条約（UNCLOS）が沿岸国に与えた範囲、56 条に風からのエネルギー生産の主権的権利、及び人工島、施設、構築物の設置・利用に関する管轄権が謳われている。
- 公物空間である海は多様な資源が存在し、再エネ海域利用法は 2 つの現代的課題を顕在化した。
  ① 領域主権の及ぶ空間と及ばない EEZ の管理という現代的課題
  ② 公物管理と国民の共有主権の活用

研究発表

① 日本の多魚種漁獲漁業に対する UNCLOS に基づく漁獲枠管理の適用可能性　中村洸介（岩手大）

② 水産業におけるジェンダー主流化――持続可能性への貢献　　松原花（東大大学院）

ジェンダー平等実現に向け、政策・事業・組織運営のすべてのプロセスにおいてジェンダーの視点に立った対応を行うための取り組み（ジェンダーも主流化）が国際的に推進されている。水産業においても地域の水産資源利用の可能性を高め、課題解決へ寄与する可能性がある。

③ ニホンウナギの国際的な資源管理の現状と展望　　武井良修（慶応大学）

ニホンウナギの資源保護・管理の問題を国際法の観点から分析し、持続可能的利用を検討。

④ 海に対する意識調査の国際比較分析　　法理樹里（農林水産省）

「持続可能な開発のための国連海洋科学の 10 年（UNDOS）」がスタートし、多様なステークホルダーと研究者が共に研究をデザインし、成果の社会実装を目指している。

⑤ 日本の北極政策の特徴と展望　　木村元（海洋研究開発機構）

各国の北極政策・極域政策と日本の北極政策の比較を行い、日本の北極政策の特徴を示す。

⑥ 領海における沿岸国保護権の法的性格：軍艦等に対する起草上の理解　　平野和男（防衛省）

⑦ 世界遺産知床の自然保護と沿岸漁業者の携帯電話不感地帯解消　　松田裕之（横浜国大）

パネルディスカッション「洋上風力発電の振興をめぐる論点と政策課題」

モデレーター：高木健（東大大学院）　パネラー：来生新、森田孝明（長崎大）、井上登紀子（東京海上保険常務）、山口健介（東大公共政策）

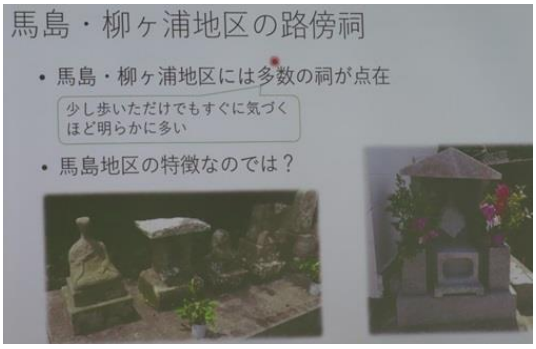
- 洋上風力発電は 2040 年には東京タワー級の大きさ、5.7GW にも達し、EEZ でも設置される。
- 日本は漁業権を優先した利用を行ってきたが、今後は領海内から EEZ への進出が予想される。
- 沖合は広域合意が必要で、浮体式の建設、漁業に想いを寄せる人材育成が必要になっている。
- 東京海上は世界の 100 プロジェクトに関与しているが、必ず事故ルので、リスクヘッジが必要。
- コスト、未知領域への挑戦、産業育成の観点が大事だ。

所感：海洋国日本に、洋上発電推進でエネルギー自給の時代がやってくるという夢のような話だ。周辺国との調整、漁業者との調整、新技術開発、資金など課題山積ではあるが…（文責　中瀬）

島嶼コミュニティ学会第 14 回研究会

日時：12 月 14 日

所：順天堂大学本郷お茶の水キャンパス



1．大津島・馬島地区の路傍祠　寺田篤史（周南公立大学）

大津島は周南市の徳山港の沖合に、馬島は大津島の南部で、かつては独立した島だった。大津島には 7 集落、馬島には 2 集落がある。馬島には多くの路傍祠があり、四国 88 カ所を模した「お大師様」と呼ばれる路傍祠の他、数種の路傍祠が混在する。馬島は、漁師町ゆえの不安が信仰に向いた可能性が大きい。その地域の祭りの継承がコミュニティの核となってきた。

2.　三島村の人口減少問題　　城本高輝（松本大学観光ホスピタリティ学科）

・　三島村は、鹿児島県の離島で、竹島 52 人、硫黄島 123 人、黒島 167 人の合計 342 人。
　三島村は特殊な自然環境と歴史・文化的資源の保存と活用が評価されジオパークに選定された。

・　宅配業者がないため、フェリー到着後、若い島民が高齢者の荷物をボランティアで配送する。台風被害には、島民がボランティアで復旧するが、IT やマーケティングの専門人材が少ない。

・　三島村は人口減少が深刻で、オンラインによる人口流入が必要で、先ずは副業化が現実的だ。

3.　宮古島・1936 年の諸相：「博愛記念碑」60 周年に想う　　辻朋季（明治大学）

・　1873 年に宮古島沖で座礁したドイツ商船「ロベルトソン号」の乗組員を島民が救助したことへの謝意を示すものとして「ドイツ皇帝博愛記念碑」が 1876 年に建立され、1936 年には「独逸皇帝感謝記念碑 60 周年記念式典」及び数々の行事が盛大に執り行われた。

・　「60 年式典」の構想経緯や背景、実現に尽力した人物、参加者の顔ぶれ、現地の様子などを、当時の新聞記事、当時の報告書などを手掛かりに明らかにした。

皇帝博愛記念碑（1876 年）　皇帝感謝記念碑（1936）

・　サイードが『文化と帝国主義』で提起した、「何が描かれていないのか？」という着想を得て、報道や記録から漏れた事象も拾い上げるため、大阪商船の沖縄航路の運航表を活用し、いかなる乗客が、どんな目的で乗船かを考察し、1936 年当時の宮古島等の政治・社会状況に迫った。

4.　瀬戸内・一部離島の限界集落化と地域自治の変容　　本多俊貴（拓殖大学）

島と村落からなる島嶼コミュニティの基盤を支えた繋がりが、高齢化で変容している。限界集落化の実態報告は極めて少なく、島嶼の高齢化は深刻だ。独居女性の増加は、男性に担われてきた自治活動が不全化し、「共同体」諸機能が崩壊し、道路・水路等のインフラが崩れつつある。

5.　西表島との架橋に対する鳩間住民の意識の変化　　堀本雅章（法政大学沖縄文化研究所）

離島の定期船の欠航が続くと日常生活に多大な影響をもたらすことから、架橋が検討される。近年、都心からの移住者は利便性を求める人が多いが、観光関連就業者は、自然破壊、生活環境の悪化、景観などが損なわれるなどの理由から反対する人が多い二律背反とも言える状況が。

6.　魚類養殖に果たす漁協の役割と課題：漁協と漁協者　　佐野玲央、鳥居享司（鹿児島大）

・　国民への水産物供給が漁協の経営悪化で大きな課題となっている。垂水市漁協ではカンパチを①海外市場への着目、②輸出体制の整備、③輸出拡大を進め、組合員の経営向上への寄与を図り、漁協と漁業者にとって一石三鳥となった。漁協内外の深刻な人材不足解消の可能性が出てきた。

7.　八丈島のケービョーメのアンケート：消滅危機言語八丈語　　後藤康人（東京都江戸川区）

・　八丈・青ヶ島のオオトカゲは「とかげ」を「ケービョーメ」と呼ぶが、伝統的な八丈方言の話者数は減り続け、継承が危ぶまれている。将来的には地域の自然生態系の喪失が危惧される。

所感：海洋国日本の自然保全と防衛を、１万を超す島嶼の人々が守っている。ウクライナやガザ等世界が揺れ動く中、その貴重さはますます大きくなっている。島嶼に注目したい。（文責　中瀬）